

衣生活におけるリサイクルの問題について (1)

玉田 真紀 (尚絅女短大)

目的 大量生産、大量消費の社会ができる以前、繊維製品は無駄にできない物として扱われ、着用から再利用、廃棄まで考えて繰り返し使いきる工夫をしてきた。布や衣服は貴重な物であり、生活する上で上手に再利用する技術を身につけることが必要不可欠だった。そうした価値観も、作り直す技術も伝承されなくなった今日、消費型社会の生んだ廃棄物は環境を破壊する問題として深刻になってきている。本研究では繊維製品の今後のリサイクルについて考えていくために、地方行政における衣類ゴミの分別収集方法について一般家庭に配布されるゴミパンフレットより調べ、生活者にとって日常リサイクルを実行しやすい状況にあるかを考察した。ここでは東北地方6県について調査した結果を述べる。

方法 平成7年5～6月に宮城県、8年5～9月に他5県の計400市町村に郵送法でゴミパンフレットを依頼し収集した資料より、繊維製品がどんなゴミの扱いになっているかを調べた。

結果 313市町村 (78%) より回答を得た。内9市町村はパンフレットを作成していなかったため304市町村の資料が回収できた。また聞き取りにより内容を把握した8市町村を加えて考察した。東北地方の274市町村 (85%) が衣服等を可燃ゴミ扱いにし、資源回収扱いはわずか92市町村 (29%) だった。いかに燃やされてしまっているかがわかった。資源回収の方法は市町村が日や場所を決め一括に集める方法と、子供会や町内会など地域の集団資源回収を支援する方法があり、廃品業者が少なくなった今日、生活者の意識を高め自主的に地域で回収する方法がより多く見られた。資源回収といってもパンフレットには詳しい回収日や出し方もなく生活者が出しにくいものが多く、資源化を進める意識は低かった。